

私は時々奇妙な感覚に襲われることがある。海が見える場所に行くと、臍の辺りのもつと奥深いところに、引っぱり合うような違和感を覚えるのだ。けれど違和感はそのに留まるのではなく、上のほうに上がってきて胸の辺りがざわつくのである。

私はこの奇妙な感覚の正体を、常々知りたいたと思っっているが、それを理解してくれる人に出会ったことがない。もとより自分でも、うまく説明できないのだから仕方がないことかもしれない。

*

入国審査に長い時間を費やしエアポートビルの外に出ると陽が傾き始めていた。

私はタクシーの窓を叩いていった。

「インド博物館まで」

運転手は親指だけで、後ろの座席を示した。

車内は趣味の悪い香の匂いがして、私はす

ぐに窓を開けた。前を向くとバックミラーの
付け根に、枯れかかったマリゴールの小
さな花がハワイのレイのようかけられてい
た。
しばらくすると、今度は外の空気が煙たく
なってきたので私は窓を閉めた。

運転手が話し始めたのはそのときからだ。

「今夜はどちらにお泊りですか？」

やっぱりだ、と私は思った。彼は紹介料が
もらえる宿に私を誘い込もうとしているよう
だ。

「サダル・ストリートまで行ってくれればい
い」

うっかりと念を押すように、そう言ってし
まった。

「サダル界限は安宿ばかりだ。旦那が泊まる
宿なんてありませんよ。みんな薄汚れた宿ば
かりさ」

そういうと彼は白々しく私を持ち上げて、
サダルにある宿はまったく私に不釣り合いで

あるとか、その辺りの治安の悪さなどをまくし立て始めた。そのあいだ、私はどうしたら平和的に彼の口を黙らせるかを考えていた。「先に来ていた友人と待ち合わせているんだ。今夜は彼とオベロイ・グランドホテルに泊まることになっている」

オベロイ・グランドホテルはコルカタ最高級ホテルの一つである。この名前を出せばそこより良いホテルを紹介するとはいえないはずだ。

「旦那、インド博物館じゃないんですかい。私はそう聞きました」

斜め後ろから見えた彼の口元がニヤリと曲り、私の話が作り話だと思っっている様子が見て取れた。

「そのほうが、あんたが分かりやすいと思っただけだからさ。博物館も、オベロイ・グランドホテルも、サダルのすぐ近くじゃないか。どっちでも同じさ」

私は初めてこの街に来たことを悟られない

ように、こなれた風を装った。そのアイデアはうまくいったようで、彼はたちまち黙り込んだ。もちろんそれは嘘だ。オベロイはひどく高価だし、なにより私がこの国に来たのは、哲太郎のレクイエムの旅なのだから。今夜は彼がよく使ったという安宿、ダイヤモンドロツジに宿泊するつもりだ。

私は気付かれないように地図を見ながら、車の方向を確かめていた。車は今のところ正しい方向に走っていた。

*

てったろう
哲太郎と私が二人だけで初めて酒を飲んだのは、私がまだ学生だったときのことだ。十歳年上の哲太郎は私の従兄で、無精髭をはやし浮浪者のような恰好で現れた。彼は何度目かのインド旅行からの帰りで、成田空港からまっすぐに私のアパートにやって来たのだった。

あ のとき二人で銭湯に行つて、そこで彼が五日ぶりに身体を洗つたとか、半年ぶりに浴

槽に浸ったなどというので、周囲の人たちの視線を集めてしまった。はらはらしていた私をよそに、幸せそうに浴槽につかる彼の姿を思い出す。

その夜、私たちはアパートの部屋で酒を酌み交わした。

酒の肴はもっぱら旅の話で、哲太郎は長旅の疲れも知らず饒舌だったが、ふと、話のあいまにこういった。

——ところでお前は、もう五カ国に行ったそうだが、インドに行ったことがないというのも滑稽な話だ。

当時私は学業のかたわら、バイトにも精を出していて、稼いだ金で貧乏旅行をしていたが、哲太郎にそういわれたのは少々不満だった。

——そういう哲ニイはインドしか行ったことがないじゃないか。インドってところはそんなにいいところかい。

あのと看私はそう応戦してみたものだ。

兄のいない私に、哲太郎は実の兄も同然だった。子どものころ彼のすることはなんでも真似したかったし、金魚の糞のようにどこへでもついて行きたかった。哲太郎にしても末っ子だから、兄貴風を吹かせられるのはまんざらでもないようだった。

旅行が好きになったのも、彼の影響があったのは間違いない。その哲太郎から初めて馬鹿にされた気分だった。

彼は二十歳のときに初めてインドを旅し、それからというものの、インドにはまって何度も旅をした。いらい私は彼に会うと、その旅の話聞かされるようになった。

あのころ私は、将来はツアーコンダクターになりたいと思っていたので語学の方にも力を入れていた。けれど、途中で旅が好きだからという理由で仕事に就くのは、まちがいはないかと思ひ始め、旅行とは関係のない今の会社に就職した。

哲太郎は学校を卒業した後も定職にはつか

ず、旅の日々と東京と、故郷の島を行き来しながらアルバイトで暮らしていた。島では近所の人はもとより、一族からも悪い意味で一目置かれていたようだった。

——哲みたいなのはフーテンというんだよ。

お前は真似しちやいけないよ。

うちの婆ちゃんは、よく私にそういったものだ。

そんな哲太郎も三十歳を少し過ぎたころには、まるで憑き物が落ちたように旅をやめ、島に帰って家の畑と出面仕事などをしながら落ち着いた暮らしをしていた。それでも、もう一度だけインドに行って、ガンジス河の朝日を拝みたいといっていたのを、私は何度か聞いている。けれど、その夢を果たせないまま、ある日彼は死んだ。

哲太郎が死んだのは、仕事先での彼自身のみスで起きた、ちよつとした事故が引き金になったという。それは彼の三十六歳の誕生日のことだった。

のちに従兄たちから聞いたところによれば、事故は事故でも、あれは起こるべくして起きるのだと聞かされた。

彼はすでに病に侵されていたにもかかわらず、社長の温情で使ってもらっていたそうだ。事故が起きなくても長くはなかったらしい。

葬儀からふた月ほどが経ったある日、東京の私のところに、彼の一番うえの姉さんから一通の手紙が届いた。封筒の中には手紙のほかに、哲太郎の字で私に宛てた走り書きのよきな紙きれも同封されていた。

いつかお前がインドに行くことがあったら、俺の骨を少しでいいからガンジス河に流してくれ。

哲太郎

紙きれには彼らしからぬ弱々しい文字でそう書いてあり、姉さんの手紙は長女らしいし

っかりとした文面で挨拶が書かれていて、その最後には追伸として次のような一文があった。

哲太郎の私物を整理していたら出てきたので、とりあえず同封しましたが、真に受けなくていいですからね。

克江

そのメモとも遺言ともつかない紙きれを貰ってから、私はいつかインドに行つて哲太郎の願いを叶えてやりたいと思つていた。しかし、その機会を得られないままに歳月は流れ、今ようやく私はインドにやつて来たのだった。

*

車は安宿街のサダル・ストリートに到着した。

私はオベロイ・グランドホテルに泊まるといった手前、少し多めの金を渡すと、彼は丁寧に胸の前で手を合わせた。そして降りがけ

の私にいった。

「旦那、ニューゲストハウスなら真っすぐ行って右、ガネーシヤホテルならその向かい、ダイヤモンドロジなら、さらに少し先の角だ」

そういつて彼は片目を閉じてみせた。

哲太郎がインドに行つて最初に泊まったというダイヤモンドロジはまだ健在で、薄暗くなっていたが、ガイドブックで見たのと同じ看板が確認できた。

前庭のようなところから、ガラスドアの向こうに恰幅のよい人影が見えた。

中に入ると男のいるカウンターの後ろには小さな棚があつて、そこにインドの神様の絵が飾つてあつた。額縁にはマリーゴールドの花のレイもかけてあつて、ここもまたタクシの中と同じ臭いがした。

部屋はあるかと尋ねると、男は黒ぶちの眼鏡の奥から、不愛想にバス付かバスなしかを訊いてきた。

私がバス付を希望すると、彼は派手な指輪をはめた肉厚の手で大きな宿帳の一か所を無言で指さした。私がそれに記入し終えたのを見ると、今度はただ「パスポート」とだけいって、もう一度手を出した。パスポートを渡すと、彼は写真と私の顔を見比べたあと、それを放るようにカウンターの上に返してよこした。

「ルーム二〇五」

抑揚のない声でそういった。

彼の入国審査官のような態度は私を不快にさせた。この不快さのやり場がなく、とっさに私は、慚然として彼を睨むという無駄なりアクションをしていた。すると、彼は自分の顔の横に右手を近づけその手首を捻じった。彼は「それが何か？」と聞いたかったのだろうと私は思った。

そのあと階段のほうを見て顎をしゃくり上げたので、部屋は二階だということが解った。それがこの宿のチェックインの全てだった。

階段を上がると廊下の片側には、ゴミ捨て場から拾ってきたようなソファ―が置かれていて通路を狭くしていた。

私が廊下のつきあたりの二〇五号室の前に行くとき、開け放したドアの向こうに見えたのは相部屋だった。バス付を希望した時点で個室だと思い込んでいた。

部屋には八つのベッドが病室のように向かい合わせに並んでいて、左側の四つが埋まっていた。入り口近くのベッドに一人が眠っている。他は留守だった。私は空いているほうの窓際に荷物を下ろすと、すぐにその部屋のシヤワー室に向かった。

*

外のレストランで夕食を済ませ、部屋に帰ると留守だった三人も戻って来ていた。

私は自分の胸を軽く叩きながら名前をいったが、誰もがちよつとした相槌を打ったり、笑顔を返してくれただけだった。

三人のうちの真ん中の男が、どこから来た

のかと尋ねてきたので、日本からだというと、
今度は窓際の男がいった。

「島から来たんだね」

私は島という意味の「アイランド」と、国
名の「タイランド」を、自分が聞き違えたの
かと思った。

「タイランドじゃない。日本から来たんだ」
私がそういうと、彼は嫌味のない笑顔で私
を見ながらいった。

「島の国だろう日本は。フィリピンやニュー
ジーランドみたいにさ」

聞き違いではなかった。彼がいったのはタ
イランドではなく、やはりアイランドだった。

私は自分の国が島だといわれたことに驚い
ていた。が、すぐに思い出した。そうだ、日
本は島国だ。そう習ったのは小学生のときだ
ったろうか。それは、ずいぶん長い間忘れて
いたことだった。

*

私が生まれ育ったのは小さな島で、近くに

は親島と呼ばれる大きな島があった。島から
出たことがないころ、私は生まれたところが
小さな島だとは思ひもしなかった。

初めて親島に行ったときには、その街の大
きさに驚いた。高校は親島まで船で通った。
二年生になってバレーボールの大会で本州に
行ったときには、それまで大きく見えていた
親島が、ずいぶんちっぽけに見えたことを覚
えている。

後に東京に出た私は、自分の島がつくづく
小さなものだということを思い知らされた。
それでも私は故郷の島を誇りに思っていて、
自分が島出身であることを憚^{はばか}りなく話したも
のだ。

その後、故郷の島の大きさは少しも変わら
ないのに、島は私の内部で次第に小さくなっ
ていった。就職するころには、自分が島の出
身だということを口にしなくなっていた。隠
したわけではなかった。けれどいつのまにか、
訊かれなければ話すことはしなくなっていた。

「島……か」

私はベッドに横たわり、声には出さず独りごちた。

目をつむりながら窓から入ってくる騒音を聞いていると、やがて部屋の灯りが消された。

私はひどく疲れていて、すぐにも眠りたかったが、ぼんやりと故郷の島について思いを巡らせていた。記憶の向こうから流れてくるのは、幼いころに見た風景のようだった。

騒音と一緒に窓から僅かな風も入ってきて、私のベッドまで届いていた。そのうち煙が流れてきたので目を開けると、誰かが煙草を吸っているらしく、闇の中で小さな赤い光が見え隠れしていた。やがて私は眠りに落ちていった。

*

よく朝、突然シンバルのような音に起こされた。

飛び起きると、向かい側の四つあるベッドには、ゆうべ早くから寝ていた男が一人だけ

いて、ほかの客たちはすでに出かけた後だった。

残っていた金髪の青年は、笑顔で「おはよう」というと、外の騒がしさは辻サーカスが来たのだと教えてくれた。

窓から見下ろすと宿の前の路地で、ぼろを着た親子と思える五六人が、綱渡りの準備をしているようだった。その横では十歳くらいの女の子が丸い金属の板を棒で叩いているのが見えた。サーカスの始まりを知らせているようだ。しかしこの辺りは、安宿ではあるが宿が多い場所なのに、なぜこんなところで朝っぱらからサーカスなんだろうと思った。私は少し苛立ちながら、振り返って後ろの彼に訊いた。

「このへんには、朝からサーカスが来るのかい」

「ああ、そうだよ」

「なんで朝からなんだ？」

「稼ごうと思っっているからさ。早くしないと

泊り客が外出してしまおうと思っているんだろ
うね」

彼は平然としていたが私は腹立たしかった。

それでもまだ窓枠に手をかけ、路地の様子を
窺^{うかが}っている、後ろから彼の声が聞こえた。

「どこの島から来たんだって？ 昨夜、ウト
ウトしながらみんなの声が聞こえたんだ。島
がなんとかって……」

振り返ると、彼は屈託のない笑顔で私を見
ていた。

「日本から来たんだ」

「ああ、日本から」

彼はそういうと、また笑顔を見せた。

*

バッグの中には、サプリメントの小さな瓶
に入った哲太郎の遺骨がある。

列車でベナレスに行つて、それをガンジス
河に流したら私の役目は終わる。そのあと、
ジャイプールに二三日足を延ばして、マハラ
ジャのゲストハウスだったというホテルに泊

まり、優雅な気分浸ってから帰国しようと考えていた。

朝食を済ませたら、ベナレス行きチケットを買いに行かねばならないし、シャワー用のサンダルも買ったかった。

外に出ると、まだ九時だというのに、街は既に十分にくたびれた顔をしていた。けれど不思議なことに一方では物凄いエネルギーも発散していて、熱気が私のシャツを通して肌からみついてきた。その矛盾に満ちた街を、言い寄ってくる物売りたちを追い払いながら、私はチョーロンギー通りに向かって歩き始めた。

*

ハウラー駅は夜だというのに人で溢れていた。

私が乗る夜行列車は、すでにプラットフォームに入っていて、その巨体を横たえている。

自分の名前が貼り出された車両を探しまわっているのは、列車が車両から車両へ移動が

できないという厄介な仕組みになっているからだ。その作業に時間を要するのは、駅の中が混みあっているうえに、張り出された紙の質も悪ければ、インクも鮮明ではないからだ。荷物を背負う肩に、腹立たしさまでもが食い込んでくる。

案内の放送は理解できないから、時折ベルのような音が聞こえるたびに、私はドキドキした。

ようやく自分の名前を見つけ出して車両に乗り込むと、ほどなく列車は足を掬うように一揺れした。私はよろめいて窓の鉄格子にかまいった。列車は動き出していて、手動式のドアはまだ開いたままだった。私だけが慌てていた。ホームがゆっくりと流れ始めるが、スピードはなかなか上がらなかった。

買ったチケットは一等コンパートメントで、私は初めて個室の乗客になることを楽しみにしていた。

期待してドアを開けてみると、うす暗い部

屋の両側にベッドが三段ずつあった。
硬いベッドは緑色のビニールで覆われ、寝具らしきものはなく、あるのはただ埃のざらつきだけだ。それが三時間も並んだうえ、窓口の係員に心づけのドル札を渡して取った一等コンパートメントだった。

部屋の中には既に二人の乗客が入っていた。一人はこざっぱりとした白い服に身を包んだ初老の男で、細い飴色の手を組んで既にくつろいでいた。痩せた身体と丸い眼鏡はどこか、マハトマ・ガンデイーを思わせた。

もう一人は欧米風のきっちりとした身なりで、彼は荷物の整理をしている最中だった。どちらもこの国の人のように見えた。

私は荷物を下ろし、二人に向かって合掌しながら会釈をした。すると初老の男も同じようにしながら、握手を求めるように手を差し出してきた。

「私はキシヨール」

もう一人の若い男も手を止めると、こちら

を振り返り同じように手を出した。

「エリオットです」

私も名乗りながら、ぎこちなく彼らの手を握った。

「おや、今夜は三人だけとは珍しい。いつもなら始発から、あらかた席が埋まってしまふのだが。この三人が今夜の旅の友というわけですね」

キシヨールは誰にともなくそういった。

私はお喋り好きのインド人に悩まされるのではないかという気がして、食事を済ませたら早々寝袋に潜り込もうと考えた。

イギリスから来たというエリオットは、一見老けて見えたが私よりもずっと若かった。彼は祖父の代に一族がイギリスに渡り、生まれも育ちもイギリスだが、いちど一族の祖国を見たかったのだといった。

「ムンバイの南、パナジが僕の先祖の故郷です。この旅の最後にそこを訪ね、ムンバイから帰国します」

荷物の整理をしながらも、礼儀正しい彼は
好感がもてた。

どうやらこの国の事情に詳しいのは、キシ
ョールのようだ。そこで私は荷物を整えると
キショールに訊いた。

「食堂車は何号車でしょうか？」

彼は愉快そうな顔をみせた。

「食堂車はありませんよ。この列車には」

私は慌てて胸元から切符を取り出して見せ
た。

「でも、ほら、ここにキッチンカーと書いて
ある」

小さな文字を指で示しながらそういったが、
彼はそれに一瞥もくれずにまた笑った。

「キッチンカーはあります。でも食堂車はあ
りません」

私が並んだブックキング・オフィスの窓口の
男が思い出された。列車の中で食事はできる
か？ という私の問いに、彼ははつきり「も
ちろんだ」といったのだ。

「この列車にあるのはキッチンカーだけです。調理をする場所ですよ」

「……？」

「待ちましよう。いずれ注文を取りに来ます。料理が出来上がると運んできますよ。列車が駅に停車したときにね」

そうだった。この列車は、車両から車両に移動できないのだった。だから私は乗客名簿に自分の名前を探して走り回ったのだ。つまり、列車の中で食事が取れるかという意味では、ブッキング・オフィスの男の返事は間違いではなかった。

「夜は長いです。ゆっくり話でもして過ごしませんか。もし、よろしければですが。つまり、あなた方二人が同意されるなら、という意味です」

彼は私を驚かせた。それは彼が「もしよろしければ」といったからだ。

私がこの国に来て五日あまりが経っていたが、この国の人たちからそういう言葉はもち

ろん、それに類する素振りにも接したことが
なかったからだ。

ここでは、いつだってこちらの気持ちは考
慮されずに、すべてのことが強引になされて
きたように感じていた。

リキシヤの料金も、どこかで並んでいると
きも、レストランで相席になるときも、こち
らの気持ちなどお構いなしだった。そのうえ
人々は私に話しかけては、何処から来たか？
職業は何か？ 兄弟は何人か？ 結婚はして
いるか？ 給料はいくらか？ などと、他人
のプライバシーに平気で踏み込んできたし、
時にはレストランの料理を選ぶときやチップ
すら、彼らが主導権を取ることもあった。

私が静けさを求めて、オベロイ・グラランド
ホテルのロビーに逃げ込んだときでさえ人々
は私の身边を訊きだそうとした。それだから
キシヨールのことばは私を驚かせたのだ。

「ええ、皆さんがよろしければ」と私がいう
と「嫌なものですか」とエリオットは目を輝

かせた。

こうして私たちの夜が始まった。

気がつくくと街の灯りは遠くなっていて、黒い窓が私たちを映し出していた。

「どちらから？」

キシヨールが訊いてきたので私は「日本から」と答えた。すると彼は、何かを思い出すように小さな声でいった。

「ああ……島の……」

まただ。

日本から来たといって島という言葉が出たのは、この旅で二度目だった。

確かに日本は島国なのだが、そのとき私は、もしかするとキシヨールは日本という国を知らないのではないかとさえ思った。というのも、数日前に小さな店でサンダルを物色していると、店主から何処から来たのかと尋ねられたのだ。そこで、日本から来たかと答えた私に、彼は真面目な顔で「この町にはピクニックに来たのかい？」といったからだだった。

「いえ……」

私は少し、白けたようにいったかもしれない。か

「日本……国の名前です。東京から来ました。日本の、東京に住んでいます」

何故か早口にそう付け加えていた。私は無意識のうちに東京のことまでいっていた。それも二度……。

「東京。知っています。行ったことはありません。せんが大きな都市ですね」

私は不快感を顔に出してしまっただろうか、エリオットが気遣うように口を挟んだ気がした。

「ええ、東京はコルカタと同じくらいの人口です」

私がいうと、キシヨールが小さく呟いた。「そうですか。日本にも同じくらいの町が」

それは酷く同情的に聞こえた。

「コルカタは、そう遠くないうちに、人口が溢れるでしょう」

キシヨールは憂いを帯びた顔でそういった。
私は人口の話よりも、今しがたの「島」と
いう言葉に引っかけかかっていた。

「食べるという行為は全く厄介です。もし、
人間が食べるということをしやらずに生きられる
なら、この国の未来もずいぶん明るいものにな
るでしょう」

私はまだ島のことを考えていた。

キシヨールが日本をどれほど知っているの
か否かは、どうでも構わない気持ちになって
いた。

「ところで、島とは何をもって島というので
しょうね」

私がエリオットにそういったのは、日本を
島といわれて気分を害したからではなかった。
ただ彼がどう思っているのか、興味があった
にすぎなかった。

「島の定義は、四方が海に囲まれているとい
うことです」

エリオットは若者らしく、とまどいもなく

そういい切った。

「ええ、わかります。しかし、そういう意味において、オーストラリアも島ということになります、そうではない……ですね」

少々屁理屈っぽかったが前々から思っていたことだ。

エリオットは黙り込んだ。しかしそれが、話を止めたわけではないらしいことが私には分かった。

しばらくすると列車の速度が落ちてきて、どこかに停車した。

がらんだりのホームに私の解からない言葉が響いた。それから慌ただしく私たちの車両に乗り込んできた人の気配を、ドアの向こうの足音に感じた。

キシヨールは、子どもが「ほらね」というような顔を見せた。

「来ましたよ。今にこの部屋にも来ます」
キッチンカーのボーイは日本の学生服を白くしたような服装で、胸には金色のバッジが

つけられていて、手にはペンと伝票を握っていた。

私は二皿の料理と飲み物を注文した。私たちの注文をとるとボーイは足早に部屋を後にした。それからしばらくして、また慌ただしい足音のあと、列車は再び動き出した。

*

「如何です？」

わたしたちが食事を済ませると、エリオットが荷物から出してきたのはインド産のラム酒だった。

「オールド・モンクですね。良い旅の友になります。特に長い夜には」

キショールの顔には、今までとは違った種類の笑みがこぼれていた。

「何か入れるものはありますか」

エリオットの声に、私は自分の荷物の中身を頭の中で広げながら、携帯歯磨きセットの細長い透明なカップを取り出した。キショールも暫く考えてから、何かの瓶の蓋を出して

きた。

「私はこれで……。血圧の薬ですよ」

彼はそれを証明するように薬の瓶も出して、ラベルを私とエリオットに見せた。

「今夜は安らかなひと時になるでしょうから、血圧は上がりませんよ」

彼は言い訳するようにそう言うと、鷹揚に笑ってみせた。

エリオットはボトルのキャップを開けると列車の揺れに身体を合わせながら、注意深くオールド・モンクを注いでくれた。それから最後に自分のアルミカップに注いだ。キシヨールと私の盃に比べると、それは異常に大きく見え、エリオットは、はにかんでいるような顔を見せた。

私はその瓶に貼られたラベルを見ながらいった。

「ヒンドゥー教の国で、なぜ老いた修道士という名前の酒なんでしょうか」

キシヨールは、それを一舐めすると嬉しそ

うに話し始めた。

「この国では、昔からヨーロッパの国に支配された歴史があります。それでキリスト教が入って来ました。今もあちこちに聖堂を見ることが出来ます」

エリオットも同意するように頷いた。

「インドは初めてですか」

キシヨールが穏やかな声で訊いてきた。私は「はい」とだけ答えた。

「観光でしょうか」

私は考えた。

観光ということにしておけば話は簡単だ。わざわざ他人に自分の事情まで話すことなどないのだ。しかしそうすると、この話題は一言で終わってしまうだろう。けれどよくよく考えてみると、この人たちが自分の事情を知ったところで、何も問題などないことに気づき私は話し始めた。

「ある人のレクイエムのような旅です。遺骨をほんの少しだけ、ガンジス河に流しに来た

のです」

「その方はインドの人なのですか」

エリオットとキシヨールは同時に素晴らしい、互いに顔を見合わせると微笑んだ。

「いいえ、日本人です。同じ故郷の親戚です」

エリオットは首をかしげ、眉間を少し寄せながらいった。

「日本の方が、何故ガンジス河なのでしょう
か？」

「分かりません、本当のところは。けれど彼はこの国が好きで何度も旅をしたんです。私によく話を聞かせてくれました。彼はインドを第二の故郷だと思っていたのかもしれない
ん」

「ベナレスに行くのですね」

素晴らしいながらエリオットは、私の容器に酒を足してくれた。

「さっきの話ですが……島と大陸の話です。大陸はずっと繋がっています。続いていると

いうことではないでしょうか」

エリオットはそういつてから、私とキシヨールにも聞こえるように単語だけを呟いた。

「Continent …… Continue ……」

「なるほど似ていますね。何か関係があるのかもかもしれませんね」

「むかしの人が思った、ずっと続いている感じが大陸だったのではないのでしょうか。だから海に囲まれていても、広い場所は大陸と云ったとは考えられないでしょうか。今私たちが知る世界地図のないむかしは、島とか大陸という概念もなかったでしょうね」

エリオットの話聞きながら、私はアメリカに留学した友人の話を思い出していた。

——アメリカは広いぞ。車で現地の友だちの帰省について行ったんだ。道がずっと続いているのさ。本当にずっとなんだ。嫌になるくらいだった。そのうち地球を一回りして元にもどるんじゃないかと思ったよ。

私は大陸（Continent）と継続（Continue）の二

つの言葉がどこかで関係しているのかは分からない。けれど、エリオットが島と大陸についてまだ考えていてくれたことが、彼の誠実さを表しているように思えた。

「あなたの親戚の方は、どうしてインドが好きになったのでしょね」

エリオットはインド好きの日本人、哲太郎に興味を持ったようだった。

「分かりません。生まれたところが小さな島だったので、大陸に憧れたのかもしれませんが。けれど彼が好きだったのは、インドの土地というよりは、在りようが好きだった印象があります。人々の在りようが……」

私の二人に対しての警戒感は、すっかりなくなっていた。

「私と彼は小さな島の出身です。子どもころは、小さな島だとは思いません。初めてその島より大きな島に行ったとき、自分の島がちっぽけに思えました。その後、もっと広い場所を知ったとき、その島も小さく思

えました。そして東京に出てみると、私の知
っている世界が、もともとずっと小さかったこ
とに気づきました。でも、この国に来て日本
全体が島なのだというのを思い出しまし
た」

とつぜん列車の音が大きくなり、私たちの
会話は中断された。元に戻るとキシヨールが
訊いてきた。

「この国は如何でしょう」

私は今日までの滞在で、既にすっかりくた
びれていた。ここでは何もかもが不自由で、
快適からはほど遠かったからだ。

「あなたにとっては、厄介で不便な国ではな
いでしょうか」

キシヨールは私が答えに詰まっているのを
見透かしてか、予測するようにそういった。
確かに彼のいうことは当たっていた。だから
といって、この国で初めてレストランに行っ
たときのグラスの曇り具合のこと、チップを
要求するボーイたちの態度や、質問攻めでプ

ライブシーに入り込んでくる人々の話を、彼のまえで愚痴るほど分別がないわけでもなかった。けれど適当なことばが思いつかず、沈黙が部屋の中に漂った。

「どうしました？」

「考えていました」

私はその場を取り繕うために、とりあえずそういった。

「ぶしつけない方が気に障ったら許してください」

キシヨールはそう前置きをした。

「考えるという行為は、ときに傲慢な場合があります。自らの考えと異なったものを聞いたとき、あるいは考えを曲げたくないときに、人は考えることがあります。貴方がそうだと知っているわけではありません。ここは正直に言ってよい場所だということですよ」

彼が言い終わったとき汽笛が聞えた。けれど、そんな気がしたただけだったのかもしれないし、私の遠い記憶が音になって私だけがそ

れを聞いたのかもしれない。

さっきのエリオットが見せた誠実さと、キシヨールの人柄に対して、私はしだいに気持ちが悪く感じていた。

「ええ……確かにこの国は私にとって厳しい国です。初めて大陸を旅しました。広い、大きい大陸の旅……」

私の内部にあるものが、自然と押し出されるように口から出てきた。

「例えば、東京で働くようになったところから、私は島の出身であることを忘れようとしてきたのかもしれませんが。それどころか、忘れようとしていることさえ、忘れようとしていたのかもしれない。今、その理由を考えていました」

私はそのとき、いったい何をいいたかったのだろうか？

「島は嫌ですか」

私はまたしても口ごもった。それはあまりに直接的な質問だったからだ。けれどキシヨ

ールが、オールド・モンクを飲み干し、エリオットから次の一杯を注いでもらっている間に私はもう答えていた。

「いいえ、そうではありません。島は私の故郷です」

そんな言葉が、滑らかに自分の口から出たことに驚いた。けれど私は島の息苦しさが嫌で島を出たのではなかったか。島の出身だということをお口にしなくなったのは何故だったのか。少なくとも、今だって私のなかの島というものが否定的にキショールに伝わったから、彼はそんな質問をしたのではないのか。

「私は、島の国に行ったことはありません。国を出たことさえないので。大陸にいても五つの町しか知りません。たぶん死ぬまで。しかし、人が生きていくことにおいて、島か大陸かということに大きな違いはありません。生きるということの前で、多くのことはささやかなものです」

エリオットは頷き、私はただキショールの

目を見ていた。それは肯定的でも否定的でもなく、曖昧に感じられたかもしれないが、私は彼の目に宿る、本質を射抜くような光に引き込まれていたのだ。

「私が島に息苦しさを感じたのは本当のことです。けれど、今になってみると、貴方のおっしゃるとおりかもしれませぬ。あのころ私は若かった」

キシヨールはエリオットの前に小さな蓋の盃を差し出した。

「私にもう一杯頂けませんか」

エリオットは気がつかないのが申し訳ないという素振りです慌てて酒を注いだ。

「若いころには誰もが大きなものに心惹かれます。私にも、そんな頃があつたのですよ」
キシヨールはそういうと、顔をくしゃくしゃにして笑った。

「とにかく別世界は魅力的に見えるものです。今は五つの町だけで十分です。私はこの齢になっても、五つの町さえよく知らないのです

から」

そういうとキシヨールは、新しく注がれた酒を、蓋の中でまわしながら話しを続けた。

「島のことはわかりませんが、島はあなたが思うほど小さなものでしょうか。四方が海ならば、いつでもどこへでも出航できるのです。ある意味、大陸よりも可能性に富んでいます。別世界への憧れは、若い時代の熱病のようなものです。誰もが一度は感染します」

私の掌に包まれた小さな盃は、天井の灯りを照り返して金色に輝いていた。それは私に故郷の海を思わせた。

私たち三人を入れたこの小さな部屋の空気は、私にあのことを話してみたい気持ちにさせていた。

「不思議なことがあります」

二人が同時に私を見た。

「海が見える場所に行くと、臍の辺りのもつと奥が引っ張られるような感覚を覚えるのです。でもその違和感は、そこに留まらず上の

方に上がってきて胸をざわつかせるのです」
二人は何か考えているようにじっとしていた。

「今までそのことを理解してくれる人はいませんでした。もったも私自身でさえうまく説明できないのですから、仕方がないのですが。

私はあれがなにか知りたいのです。あなた方は似たようなことはありませんか」

短い沈黙のあとエリオットが少しとまどい
いがちに、ゆっくりと声を出した。

「サウダージという言葉を知っていますか」
初めて聞く言葉だった。

「いいえ。英語でしょうか」

「ポルトガル語です」

「どんな意味です？」

「世界で最も翻訳の難しい言葉。翻訳家泣かせの言葉と言われているようです。同じ職場にポルトガル人がいて、その言葉を知りませんでした」

私はその言葉にひどく興味を持った。

「どうぞ、もっと話してください」

キシヨールは黙っていたが、彼も興味を持った様子が小さな動きから感じた。

「哀愁とか郷愁に近いようですが、それでは十分じゃないようです。英語には当てはまる言葉がないので説明できないらしいのです。人や物、場所などから距離があり、それを懐かしむような気持ちも含まれているようです……」

「距離？」

キシヨールのしわがれた声がした。

「はい。人や物や場所との距離、時間や心との距離もあるのかも知れませんね」

キシヨールはそれを聞くと、目をつぶって何かを考えているふうだった。

「過去に起こったことを、もう一度経験したいような気持ち、遠い祖国や家族から離れて抱く感情。生まれ故郷を懐かしむような気持ちも……。このことについて、ずいぶん話しましたが、彼と私が英語で話す限り、完璧な理

解は不可能のようです。残念ですが。だから私たちも……」

エリオットは、自分のカップに口をつけ、すでに空になっているのに気づいたが、そのまま話し続けた。

「英語は、世界に通じる最強の言葉と、思ってくださいましたが、心象を表すにはポルトガル語のほうが勝っているのかもしれない。非常に繊細で、心の機微に富んだ言語かもしれないね」

部屋の温度が下がってきて、列車が内陸に向かっているのが伝わってきた。

「二年前に、一人でポルトガルに行きました。彼の感じるものを、僕も感じたかったからです。リスボンの公園では人々に話しかけ、サウダージについて尋ねてみました。酒場でフアドを聴きながら、空想をめぐらせたり、その客にも尋ねました。彼らは陽気に僕の話し相手になってくれましたが、でも……」

私は一つの言葉のことで、異国に行った彼

の若さを眩しく思った。

「それは、言葉ではないのかもしれない」
さつきから目を瞑り、眠ってしまったかと思つたキシヨールが突然そういつた。

「言葉ではない？」

エリオットの大きな目がさらに大きくなつた。

「心とか魂のような、本当にあるけれど形のないもの。誰も見たことがないもの。それは言葉で説明できなくても、誰しもが持っているものだと思います」

そのとき俄かに、心の中の遠いところがざわざわし始めた。私が海を見たときに感じる臍の奥の、あの違和感に似ていた。そのときだった。

「あなたが先ほどいつていたものは、サウダージなのかもしれませんね」

キシヨールはそういうと、私を見ながら自分の盃を顔のあたりまで上げた。

「我々が、ガンジス河に寄せる想いと似てい

る気がします。この国を知らない者にとって
はただの河です。しかし私たちの多くにとつ
て、それは特別な河です。それはもう理屈で
も何でもありません。この世には説明のつか
ないことがたくさんあります。その一つがガ
ンジスであり、サウダージであり、あなた
の奇妙な感じ……。もしかすると、それはあ
なたの中の島そのものかもしれませぬね」
キシヨールはそういうと、オールド・モン
クを呟った。
エリオットは私の方に向き直ると嬉しそう
にいった。
「あなたは故郷の島をとて愛しているので
はないでしょうか？　きっとそうです」
エリオットの、まだ世間ずれのないような
目が私を見ていた。
キシヨールは、上を向いてコンパートメン
トの中をゆっくりと見渡した。私も彼につら
れて箱のような部屋を見あげると、天井には、
今の時期には使われない頑丈そうな扇風機が

あつた。

「この小さな部屋も、島かもしれませぬね。私たちは互いに選びようもなく同じ部屋になった。あなたが故郷の島に生まれたように。けれど、あなたは途中下車もできる。島を飛び出したように。そして再びこの列車に乗ることもできます。いずれにせよ、すべては問題ではありません」

「この部屋が島……。なんて良い響きなんですよ。ここは夜行島ということですね」
エリオットは、何かいいものを見つけた少年のような顔になっていた。

「それでは、またこの島でお会いする日まで」

キシヨールはそういうと、薄っぺらい綿布を被って身体を横たえた。

*

気がつくくと日付が替わっていた。
エリオットと私もそれぞれのベッドに別れた。

少しの寒さと列車の大きな音だけが、私たちの小さな部屋を支配した。

私は寝袋に深く身を沈めた。

満たされた疲労の中で、眠りに落ちかけたとき、また汽笛が聞えた気がした。それはこの列車の汽笛なのだろうが、私の脳裏に流れたのは母と子どもの私が二人で夜汽車に乗っている姿だった。それは絶対にあるはずのない記憶なのに遠く懐かしく思った。私が聞いたのは、船の汽笛だったのだろうか。やがて記憶は深い夜の果てに小さくなっていった。

*

ガンジス河の近くに宿を取ったのは、哲太郎が喜ぶだろうと思つてのことだったが、そこはひどくみすぼらしい宿だった。よく朝、夜明け前に河のほとりの沐浴場に行つた。

すでに土産物屋が辺りをうろろしていて、数人の若い男がそばにやって来た。見ると小

瓶に入れたガンジス河の水を売りつけようとしていたのだった。聖なるものを金儲けの材料にするのは、いずこの地も同じだが、思わず笑いがもれた。

彼らは私が遺骨を流しに日本からやって来たことを知ると、少し神妙な顔つきになり、そのあとには誇らしげな顔になった。そして意外にも私から遠ざかってくれた。

河の向こうには、まだ昇らない朝日がピンク色のグラデーションをつくり、空と河の接点では緑がかったグレーが、その境目を曖昧にしていた。

河には数艘の小舟が見え、もっと手前には沐浴する人々や、祈りを捧げる人々の姿があった。

私は花売りから小さな花束を買うと、その花の中から一番大きな葉を引き抜いて、小舟にみたてた。そこに哲太郎の遺骨をふりかけ、その上に花びらを注いで河に浮かべた。

小舟は何故か戸惑うようにその場で少し揺

れていた。しばらくするとくるくる回り、突然流れて行った。哲太郎との、べたついた別れの時間はなかった。

小さな舟はやがてベンガル湾に出るだろうか、その前に沈んでしまうだろうか、それとも途中でどこかに引っかかるだろうか。考えても仕方のないことを、ぼんやり思いながら、舟を見送った。

私は安堵と小さな達成感に包まれながら、私に島を振り返らせてくれた、あの二人の旅人たちを思い出していた。

河のそばでは、人々が沐浴する水の音がゆかしくあって、それが私にまた島を思い起させた。そしてまた、あの奇妙な感覚に襲われた。

私はその奇妙な感覚をゆっくりと味わった。今はそれを楽しんでさえいた。

私が河のふちから離れて歩き出すと、さつき声をかけてきた土産物屋が目ざとく私を見つければ、水を売ろうとやってきた。

スピーカーから祈りのような歌が流れ始め
辺りが俄かに活気づくと、さらに物売りが集
まってきたて私を囲んだ。

気がつけば、私は指を折りながら、島に
くには、いくつの土産が必要かを考えていた。
一人の物売りが、私の肩越しに指をさした。
振り返ると、沐浴する人々の姿が黒いシル
エットに替わっていた。

私は、その向こうに潤みながら輝いている
のが、河の水面なのか、あの二人の旅人との
思い出なのか、故郷の記憶なのかは、わから
なかった。

了